大塚敬節
矢数道明 責任編集

近世漢方医学書集成

72

津田玄仙 一

名著出版 刊

NANJING UNIVERSITY OF CHINESE MEDICINE
南京中醫藥大學
1954
南京中医药大学图书馆版权所有

近世漢方医学書集成 72 津田玄仙(一) 第Ⅲ期 全40巻

昭和五十八年二月二十五日 発行

編者 大塚敬節 矢数道明

発行者 中村安孝

発行所 株式会社 名著出版
東京都文京区小石川三ノ十ノ五
電話東京(八一五)一二七〇番(代)
振替口座 東京七一二〇七四九番

予約限定版

製版所 株式会社 日本写真製版社

印刷所 有限会社 伊藤印刷

製本所 辻本製本所

落丁本・乱丁本はお取替えします。

3347－0970－8324

責任編集

大塚　敬節

矢数　道明

編集委員

山田　光胤

寺師　睦宗

大塚　恭男

矢数　圭堂

松田　邦夫

凡例

一、本書第七十二巻「津田玄仙㈠」には『療治茶談』巻一～巻八までを収録した。

一、本書は全て影印版によって収録したが、影印にあたっては次のようにした。

イ、新たに柱と頁数を付した。

ロ、底本を縮少し、一頁に半丁ずつ収めた。

ハ、裏表紙や記事のない白紙は省略した。

ニ、底本にある蔵書印及び書き込みは省略した。

ホ、印刷不明な箇所は、他の版本等により補正したところもある。

一、底本は次の通りである。

療治茶談　版本　十巻十冊（矢数道明所蔵）

本書七十二巻の底本は、巻一（初編）明和七年、巻二（後編）天明元年、巻三（三編）天明四年、巻四（四編）寛政三年、巻五（勧学治体）天明八年、巻六（五編）享和三年、巻七（六編）文化五年、巻八（続編）寛政十二年版である。

一、解説は藤井美樹（日本東洋医学会評議員）が執筆した。

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook

田村（津田）玄仙

藤井　美樹

田村（津田）玄仙小伝

田村玄仙（一七三七――一八〇九）は、名を兼詮、号を積山と称し、また玄僊とも書く。本は津田玄仙といった。津田氏は代々奥州白河藩松平越中守の侍医で、奥羽の間に名が聞こえていたが、父津田玄琳は、なぜか辞職して白河を去り、岩代国（福島県）の桑折村に隠退した。玄仙は元文二年（一七三七）桑折村で生まれた。玄仙は医業を家庭で学び、やや年長になってから、水戸に遊学し、医業を芦田松意について勉学して上達し、さらに良師を尋ねて諸国をめぐって後、京都で饗庭道庵を師匠にして、その秘伝をうけ、久しい間、京都大坂に居た。後に江戸に

来て開業したが、その治療は好評で治を乞う者が多く、また玄仙の医術を学ぼうとする人が多く、ついには百余人にもなったという。それなのに、どんな理由があったのか、上総の片すみの馬籠（のちに君津郡波岡村馬込となり、現在は木更津市に編入）という所に引越した。

この地に享保年代から田村という医家があった。初代は田村宗悦・親房（一六六四――一七三六）といって、もとは尾張藩士であったが、浪人して江戸に来て奉公もできず、上総小櫃の烏田村の石井家にたよって医業を行い、ついで斎藤家にたよって清水に住んだ。

二代目は田村恕仙又は玄仙（一七〇〇――一七七八）といい、名を親知。尾張の生まれで、明敏活発な人で、弓が上手で評判があった。十三歳で江戸に出て江村良庵に医を学んだ。塾中で優れていたようで、六年の修業の後、上総の坂田村に来て開業したところ盛業を極め、近くの医家は影響をうけたという。それから八年位たって父宗悦の医業を手伝ったが、診療を求める人が父より多く、医名が高まり、教えを乞う門人もふえて来た。ところが、田村家を継ぐ男の子がないので、近村にいた摂津の人で吉田玄洞という治療の上手な人を養嗣にして、娘の伊予にめあわせ、矢那村に住まわせた。玄洞は生まれつき丈夫ではなく、五十八歳で養父より先に没した。そのために田村恕仙親知の後継者がなくなった。そこで、本題の主人公である津田玄仙の登場となる。

津田玄仙は馬籠に来て医業の盛名が上がっており、同じ饗庭家の学統なので、もとから知り合いだったものと思われる。（芳野金陵の「積山津田先生伝」に、「至二南総一、処二馬籠一、遂冒二田村氏一、

亦歴世之医攻二饗庭氏之学一者也」と書いてある。）そんなことから、玄洞伊予の間に生まれた能婦（のぶ）という孫娘を津田玄仙の妻として後嗣にしたいという考えがあったのではないか思われる。その恕仙親知は安永七年（一七七八）五月十四日に七十九歳で没した。

津田玄仙が田村家の養嗣になったのはいつであろうか。天明元年（一七八一）の『療治茶談』の自序及びその本文の初めには、南総津田玄仙兼詮とあり、天明六年（一七八六）正月出版の『療治茶談』三編にも同じ記載があるが、天明八年（一七八八）五月の同書の自序に田村玄仙とあり、同年九月の秋木竜玄の序にも玄仙田村君と書いてある。これらのことからみると、安永から天明まで南総にいたが、まだ田村姓ではなく、天明六年から八年四月（一七八六――一七八八）の間に田村氏を名乗るようになったものである。それは恕仙が没して十年くらい後のことである。呉秀三博士は、本伝の主人公玄仙は、田村家の孫娘を妻にしており、妻の祖父の家業を助け、祖父・恕仙の亡き後もその後を立てていた関係上、義理合いか何かでトウトウ田村家と嗣いだのであろうかと、推察しておられる。

玄仙は、眞面目で義のかたい人であったから、田村と改姓したのではないかと考えられる。それは著書の『療治茶談』の中で、しばしば医者の道義について論じており、その三篇の「答二土岐文栄一書」には、土岐氏の著書刊行を批判し、また『療治経験筆記』には、自分の治療上の失敗についての反省を述べ、和田東郭の医説を聞いて益を得たといって謝辞を述べているのでも

その人格の一端がうかがえる。

田村玄仙の肖像画は残っていない。先人の記載によると、玄仙は長身肥大で、音声は鐘の鳴るようであり、威厳があってしかも温容で、誠意をもって人に接したので、だれもかれも敬服し、心酔するばかりであった。いつも辺幅はかざらなかったが、威儀は乱さなかったという。終生医術の研究を自分の任務とし、また門下生の指導教育に全力をそそいだ。学問は朴実で、文学の素養あり、詞藻豊富であったが、それをかりて、自分の術業を飾ることをしなかった。

治療の上では、前人の経験方を集め、その機括を考え、斟酌してこれを用いた。しかも天性、治術に巧みで、宿痾久患を見て、どんな難症でも取扱い、しかも奇功を奏することがしばしばあり、そのため文字どうり門前市をなし、門人も前後で百有余人あって、五十余州にわたったという。『療治茶談』、『療治経験筆記』などの著書も多く、広く行われたので、東国では有名となった。水戸の原南陽（一七五三――一八二〇）と前後して、その地方の名医といわれた。その他、当時の名医で、原南陽を初め和田東郭（一七四〇――一八〇三）、恵美三白（一七〇七――一七八一）などと書簡の往来で、互いに質問して研究し、あたかも万年書生のようにして終身満足することはなかったという。

また救済を好み、貧しい者に施したので、近郷の人達はその徳を神の如くしたった。そして寄合いなどの席では村長などの上席で尊敬された。玄仙は卒直で、人に拘束されることを好まなか

った。白川侯が、あるとき玄仙を召し出して謁見し、厚い禄高で、侍医として優待しようとしたが、固辞した。そして言うには、「自分は鹿のようなもので、野原に放っておいてもらった方が幸福である。もしお殿様がご病気になられることがあったら、命令次第いつでも参上して、薬餌をさしあげ、殊恩の万が一にお報い申しあげます」と。

上総地方は山の多い所で、病家への往診にはいつも牛にのって出かけ、書物を牛の角に引かけて読みながら行くので、ある人が、君は項羽の伝でも読んでいるのかと、からかったら、玄仙先生、手をたたいて大笑したという。

これは、昔唐の李密という人が、山にいる師のもとに通うのに、牛の角に書物をかけていった。友人がそれは何かと問うたところ、漢書の項羽伝だと答えた故事によるのである。

玄仙は、文化六年（一八〇九）十二月二十一日病気で没した。行年七十三歳。法号は累功院積山脩徳居士。墓は田村家（千葉県木更津市畑沢一二七六番地、田村喜美夫氏）の西方屋敷内に、先祖および門人の墓とともにある。

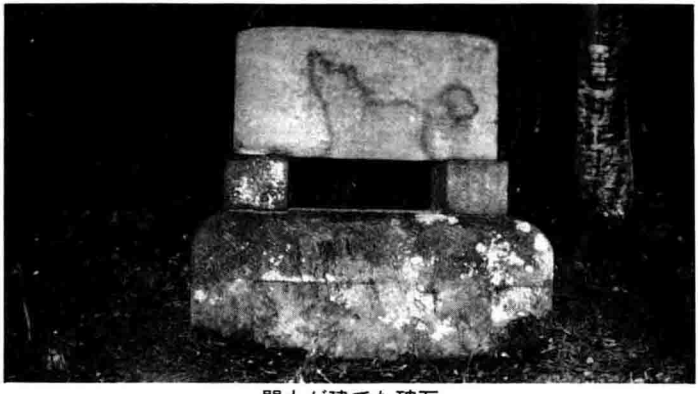
そのすぐ近くに、門人たちが建てた碑石があり、積山田村先生之墓と題して、辞世の詞、「今去二此塵寰一将遊二曠莫野一無相是郎身、何為驚二吾化一」も刻んである。

玄仙の妻能婦は、文化十一年（一八一四）七月二十七日に没す。

玄仙の子に一男一女があった。男子は津田三折、名は兼記といい、『療治茶談』の三編に校者と

玄仙の娘・岡本恕仙が建立した
天明飢饉死者供養塔

玄仙の墓は田村家の庭伝いにある。



門人が建てた碑石

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook

して名が出ている。肩書に南総とあるから父と共に住んでいたのであろうが、詳しいことはわからない。女子は名は田村墨で、恕仙を名乗り、医術が巧みであった。性質がさっぱりとしていて、女丈夫の感があり、馬に乗って往診した。毛利家の御母堂の病気を治療して奏効し、招聘されたが、数日間奉公している内に藩の制度をきらって、度々辞職を願い出たが許されなかったので、「沢の雉は餌に困っても籠の中を好まない」といって、家の窓を破って逃げ、その後は、岡本恕仙と名乗って日本橋に住み、開業していたという。

田村家の墓地内には、岡本恕仙が建立した天明大飢饉の死者の供養塔がある。

著書解題

『療治茶談』

全十巻。刊本で広くゆきわたり、日常の臨床経験による貴重な口訣の集録である。

その内容の概略は次のようになっている。

㈠療治茶談一編(初編)――序、奥州白河、父・津田玄林、明和七年（一七七〇）十一月。序、東都碩隆軒、山田尚縄、明和七年九月。自序、天明元年（一七八一）仲秋、南総、津田玄仙とある。自序の最後に、「家務粉穴、草稿未脱故先述其梗概以贈同志云爾」とある。なお凡例には、本書の意義が述べられている。

㈡療治茶談二編(後編)――後篇序、東奥白河隠医津田玄林書於砭愚亭、安永辛丑（一七八一）春三月。跋、佐久間亮采謹識、天明元年辛丑秋八月。

㈢療治茶談三編――序、北山・山本喜六。序、東野松慎、天明甲辰（一七八四）季秋朔。巻頭に、南総津田玄仙兼詮著、薩州鹿児島、佐久間亮采信学、門人、春日玄庵兼卿、根本玄白君久、森良意長父、男津田三折兼記、校とある。なお、本書には、「答土岐文栄書」、「上山紀行」という漢文がある。

㈣療治茶談四編――序、北山・山本信有、寛政三年辛亥（一七九一）中秋日。序、上総州望陀郡飯富郷、処士深河蟠竜、寛政三年辛亥春二月。巻頭、田村玄仙兼詮撰、門人、岡本玄達、大野玄貞、川上栄樹、斉藤玄慶、筆授。付録に「浴泉遊記」、「米蠹先生伝」の漢文がある。

㈤勧学治体――序、北山・山本信有、天明戊申（一七八八）十一月朔。自序、田村玄仙兼詮、天明八戊申仲夏。北羽秋田久城散人秋木竜玄昌顯甫染筆於南総秋香亭寓居、天明八年秋。巻頭、田村玄仙兼詮撰、門人、山口、根本玄白、真谷、佐藤玄良、校正。

㈥療治茶談五編――序、南総玄門遠山知則、越中牛山梵芒正則書、寛政六年（一七九四）甲寅中秋。巻頭、南総田村玄仙兼詮撰、門人、武陵、森子篤、吉備、三宅実之、信陽、下条成玉、南総、林兼孝、因州、三原詮孝、同、田中詮義、筆授。寛政七年乙卯（一七九五）三月開版、享和三年癸亥（一八〇三）正月再校。

(七)療治茶談六編――序、予州、吉田医官耕悦、西田尚絅於浪華若拙堂識、文化五年（一八〇八）秋八月望。巻頭、南総田村玄仙兼詮撰、門人は、田中詮義をのぞいて五編と同じ。

(八)療治茶談続編――撰、備中、三宅実之、寛政十二年庚申（一八〇〇）夏五月。序、備中佐野璋、寛政庚申季夏之日。巻頭、津田玄仙経験、三宅実之経験。

(九)療治茶談続編付録――序、攝陽、中川昌房、寛政庚申（一八〇〇）仲秋。巻頭、南総、積山先生経験、備中、三宅道甫、筆記。

(十)療治茶談翼――序、三原詮孝陽秋、巻頭、上総州、林謙孝玄碩述とある。文政六年（一八二三）秋八月。

以上をみると、玄仙の『療治茶談』というのは、一編～六編であり、そのあとの続編、続編付録、翼は門人の編述で、玄仙先生より学んだものをまとめた書であることがわかる。

また、『勧学治体』は別に刊行されたものであるが、後に『療治茶談』十冊本のなかに合冊されたことも知れる。（注・本集成では、『勧学治体』は、五巻に収載しているが、刊行年からみると、『療治茶談』三編と四編の間、すなわち四巻に入るのが正しいと考えられる）。

『療治茶談』の一、二編が板行されたのは一七八一年（天明元年）であるが、一編の序が一七七〇年（明和七年）とあるから、草稿ができていて板行までに十二年かかっており、草稿のできたのは玄仙三十四歳のときである。

一編につづいて、二編にも実父玄林（玄琳）の序文がみられるから、玄林は天明元年（一七八一）まで健在であったことがわかる。

《療治茶談初編》

さて、『療治茶談』とはいかなる書物かといえば、初学者の身になって教える、懇切丁寧な医療の手引書であるといえる。

このことは、一編（初編）の凡例を読むとよくわかる。

玄仙は読書のときに、治療の助けになるべきことをことごとく座右の小冊子に抜き書き（抄書という）して、十有五年もつづけ、治療のひまをみて、この冊子を読みかえしたという。太宰春台は抄書に五益あるといったが、医学の上ではその益十倍で、初学者肝要の先務と説いている。

そして「治療の間に、この小冊子に抜き書きした病証にあうごとに之を試み、その結果効果があれば朋友集会の時々喫茶の余談に出して教え、朋友がまた之を治療に試み、年月を重ねて試みるたびに神効のあるものばかりを集めて、今この一書を書いて上梓する。茶談と名づけたゆえんである」と。

本書はもとは漢文で書いていたが、加藤謙斎の『医療手引草』という書物をみてから、初学者には国字で書いた方が理解しやすいことを知り、それにならって国字で書くことにしたという。（少し漢文のところもあるが、返り点がつき読みやすくしてある）。

〈諸病虚証経験〉の項では、内傷、外感の証に補中益気湯、十全大補湯を用いるときの区別を述べ、陽虚の重き感冒を治すには、張介賓の大温中飲が卓効あると書いてある。「凡そ医学は之を病に試みて効あるを実とし、効なきを虚とす」という言葉が目にとまり、臨床家に徹しきっている玄仙の姿勢がうかがわれる。

〈死証之弁〉の項では、譫言が主証で、直視、喘満、下痢の三証は客証なりとの説明がすっきりしており、除中の証を知らなくて、恥をかかないように戒めている。

〈服法経験〉の項では、凡そ諸病真寒仮熱の証には必ず桂附の剤を冷服さすことの大切なことを説明している。

近来の古方者流は、万病一毒と立て切って攻を尊んで補ということをしない。その論説を見ると、古語をもって今日の療治へ引きあてて理屈らしく言いまわし、文面はなるほど面白く見えるが、実地診療よりみれば、用に立つこともあるが、また害になることも甚だ多い。

学風にいつのまにか偏よる癖がついて、攻剤をすごして津液を枯すことがあるのをいましめている。

《療治茶談二編》

目録が冒頭にある。〈補中益気湯秘訣〉の項では、補中益気湯一方を加減して、或る大医家が口訣を立てて療治し門人にその口訣を伝えるのに神に誓約させているが、「家伝口訣を他に向かって

求めるに及ばず、脾胃論、弁惑論の二書を朝夕熟読翫味すればその中に極秘も口訣も生ずることを知るべし」と、述べている。

〈発汗口訣〉の項では、「若し悪寒して汗あらば表邪除かざるの症也。又悪風して汗あらば亡陽漏風の症なり、これ虚実を正す大段のわかれなればよくよく心をとめて吟味すべし」、とある。

〈麻黄之論〉の項では、表邪の汗ある症には、発表の剤をおし通す症がある。即ち麻杏甘石湯の類である。この症の汗は「必ず臭気が甚だしきものなり」、とある。

《療治茶談三編》

〈医学経験〉の項に、「すべて方書を読むには、因と主証と客証とこの三つを熟覧するを初学の先務とすべし、若しこの三つに熟せざれば幾百の医書を読みたりとも治療巧者になることは決してあるべからず」と述べ、さらに、「因というは病因のこと…。主証とは医者の方で目的にとるべき病証のこと、客証とはその主証にさそわれて出る旁証（エダショウ）である」。「主と云うは俗に亭主のこと客というは俗に客人のことなり、病人に主客の両証あるは亭主の方へ客人の来るが如し、此義をかりてつけたる名なり、初学のために今その一例を述べること左の如し」といって、半夏白朮天麻湯証の条文をあげて、実に明快にやさしく説いている。そして主客の二つを朝夕に議論さすことが玄仙の門にて専要の先務とする。すべて医学は今日の療治の助けとなるべき要語奇論を抄出して朝暮に熟読し親しく之を病に試み、平易に卑近に理解することが大切と説いてい

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook